羅針盤

戸倉　新樹
Yoshiki Tokura
浜松医科大学皮膚科 教授，Visual Dermatology 編集協力者

今日的な皮膚疾患と随伴症状への理解

皮膚科学講座の教授を退任するまさに3月の記念号として，私がこれまで気になってきた疾患を，最近の症例に投影させて紹介するのは自分自身にとって意義深い．一方では，読者にとっても，こういう見方もあるということを知っていただき，加えて疾患の変遷を鳥瞰しながら最近の知識を得ていただければ，興味を喚起するのではないかと思う．

私の背景は免疫・アレルギーであり，種々の炎症性皮膚疾患の病態に興味を持った．瀧川雅浩 名誉教授にご指導いただき，光免疫の研究をまず始めたため，臨床的にも光線過敏症の症例に興味をもった．また浜松医科大学皮膚科は故 山田瑞穂先生が教室を主宰されておられた頃から皮膚リンパ腫の患者が沢山集まっており，自分自身にとっても大きな分野となり，留学先もリンパ腫を専門とする施設であった．

図にこれまで私が行った研究や臨床的興味を年代的に示すが，ほとんどが皮膚科の中でなされたものであり，疾患ベース・治療ベースの研究である．臨床で出会った症例の病態を深く解明するという素朴な姿勢を貫いた．

本特集にはリンパ増殖性の疾患が多く登場する（→ Part 2.「炎症とリンパ腫の狭間」参照）．リンパ腫は，その腫瘍細胞がどの正常細胞サブセットに由来するか，すなわち normal counterpart は何かということが重要になる．しかしその normal counterpart にあたるリンパ球の基礎研究も，日々進展する．それを後追いするようにリンパ腫の分類も新しくなる．加えて良性・悪性・リンパ増殖異常症への帰属も変わる．最近では形質細胞が増殖する疾患の分類と意義も注目を浴びている．本特集で紹介した症例は，こうした歴史的変遷を内包する疾患である．

今日的な理解を必要とする皮膚疾患は多いが，随伴症状の多様性に関わる知見が得られ，それによって疾患自体の見方も変わることもある．ここでの症例のかなりの部分はこの随伴症状に光を当てた．その理解のために，各論では私のコメントをすべての症例に付けた．本特集が読者の疾患・随伴症への理解を深めれば幸いである．

羅針盤の最後に，私のイラストを描いてくださった武田理恵さんに感謝致します．

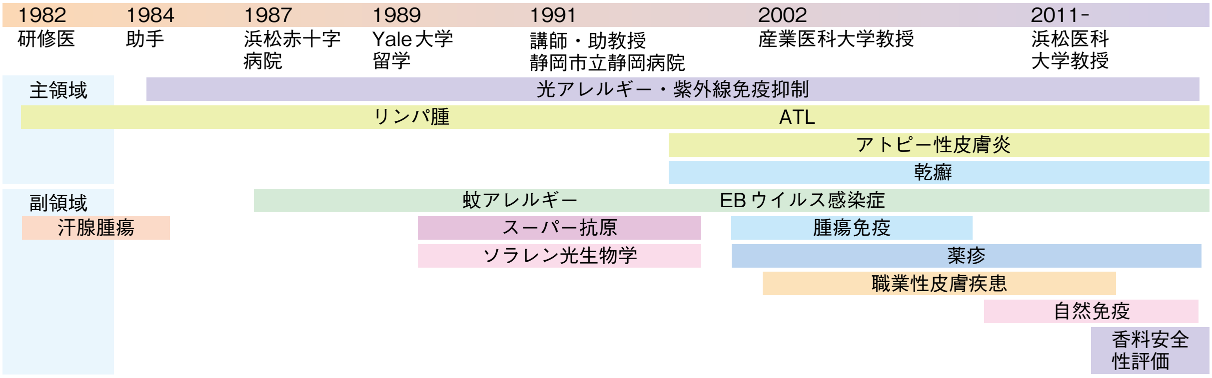

図　研究分野の流れ：戸倉新樹